

新の皮膚炎は、僕を物理的世界に釘付けにし、僕自身も釘付けにされることを望んでいる。それに対し、本を読むことはその物理的世界からの逸脱であり、読んでいる間、新は僕にとって非存在となる。読む状態から解かれたときに生じる後ろめたさとデリダの言う「自慰行為」は関連するのだろうか。文章を読むということは、その文章の世界に入ることであり、物理的な存在の世界からの逸脱(脱自＝恍惚)のように感じる。読んでいる間僕は、物理的世界における僕自身の存在から抜け出ている(脱自)。そして文章世界の中で戯れている(恍惚)。意識が「集中している」というよりも、全く異なる世界に「逸脱している」。僕にとってこの逸脱は絶え間ない「内的な声」を伴う。読み始めの初期状態では声が鳴っているが、読書世界へ入っている状態では声は意識されずただその世界として構成された状態をもたらし続けていく。

本を読むことと現実世界を生きることのあいだには、「世間的に」、エクリチュールとパロールのようなある「優劣」がある。「本など読んでいないで現実を生きろ」と。デリダの本を読むことと、新の皮膚炎にもそのような「優劣」を僕はどうしても感じざるを得ず、それが「自慰行為」として意識される。このような「優劣」を僕はどうかして越えていきたい。本を読むことが新の皮膚炎をどのように乗り越えていくのだろうか。乗り越えることができたとき、新の皮膚炎はどのようになるのだろうか。皮膚炎に対し文学がなんの役に立つのか。もとより何かの関連があるのだろうか。

新の苦痛に満ちた泣き声は、僕を瞬時に現実に戻し、読むことはこの瞬間に断ち切られる。ただし、書くことは、少し違う。泣き声を聞きつつも、なお文末まで書ききってしまうという粘り強い執着が発生する。

新が痒がっていて、そのかゆみがそれほどひどくないとき、僕は新にお話をしてやる。それを聞くことで新が落ち着くことがある。僕の連続的な声が新にお話世界への逸脱を引き起こし、新の物理的世界に存在する痒みを遮断しているかのように見える。

ルソーにとってエクリチュールは代替手段であった。人好きでありながらも口下手ゆえに人前に姿を表わすことができず、書くことを選ぶ。本来であれば、話(パロール)をするところを、書く(エクリチュール)ことしかできない。優劣がある。

ルソーにあってはいつもそうであるが、悪は限定、比較、選択という形態をとる。つまり差異[区別、差別]という形態である。文化の創出は、憐れみの情を歪め[非＝自然化し]、種や性別が何であれあらゆる〈生きもの〉の方に本能的にまた無差別的にこの情を向けさせる自然発生的な運動から、この情をそらせる。[66]

デリダがやろうとしていることは、この優劣の解消であるはずだ。

新の苦痛という現実と本の世界に戯れるという逸脱の問題は、容易に拡大できる。曰く「戦争(や災害などの不幸)に対して芸術(表現)は何か(が)できるのか」など。つまり現実対表現、現実(リアル)対仮構(フィクション)という命題である。デリダはこの二項対立の問題系に対しても有効な何かとして、本書を提示している(はず)。

現実＝present＝現前、表現・描写＝represent＝代理。

言語においてある語が何かを意味するとき、その語は、意味されているものの代わりに、我々に対してたち現れて意味する。代理・代表・表象する(represent)するということは、一方では代理なしでは現前(present)しないものを現前させることだが、他方では直接には現前させない、ということでもある。代理するということは、不在の形で現前させるということでもある。(ウィキペディア「差延」)

表現とは、現実にはないものを、一方では代理なしに現実にし、他方では直接には現実にししない。表現とは、不在の形で現実にするということでもある。

さて、不思議なことにこのレジュメ(と言ってよいのかわからないが)を書いていると、あるいは書くために考えていることで、僕は元気になった。実際、上の段落まで書いたあとに昼食のパスタを作ったのだけれど、それがとても気分良くできた。

「自分が好きなことをやる」にはこういう効果がある。これはもちろん、現実としての新の皮膚炎には直接的には何ももたらさないが、最も遠いところから新の皮膚炎にまで届くのかもしれない。この永遠の隔たりを越えてくるのが、代補であるのかもしれない。

後ろめたさを無視するのでもなく、逃避するのでもなく、それでも、できるだけ現実から遠いところへ、毎日一時間だけでも行こうと思う。